

臨床工学技士の腹膜透析療法への取り組み ～知識向上を目指して～

公益財団法人 日産厚生会玉川病院 臨床工学科¹⁾

公益財団法人 日産厚生会玉川病院 透析センター²⁾

○佐々木渉¹⁾、江東里紗¹⁾、佐藤佑介¹⁾、遠藤愛美¹⁾、相良 文¹⁾、松村彩子¹⁾、高橋真理子¹⁾、水盛陽子¹⁾、柴田邦弘¹⁾、鈴木 修¹⁾、井上博満¹⁾、河南 晋²⁾、藤井沙織²⁾、中村理恵²⁾、岩本正照²⁾、高橋康訓²⁾、今村吉彦²⁾

【背景】

当院臨床工学科は、平成4年11月に設置され、現在、男性7名、女性6名、計13名で構成されている。主な業務内容は、血液浄化関連業務、腹膜透析（以下PD）業務、ME機器管理業務、心臓カテーテル業務、ペースメーカ業務、手術室業務である。PD業務は2010年12月より開始し、当初担当の臨床工学技士（以下CE）は1名であったが、翌年2011年より2名のCEで業務を行っている。主なPD業務は、病棟ではPD関連装置の設置・動作確認、医師の指示の下にAPD装置の条件設定を行っている。外来業務としては、PD患者の透析効率算出、患者宅へ訪問しPD関連装置の定期点検を実施している。また、腎臓病教室では参加された患者様へAPD装置の操作説明を行っている。しかし、PD業務へのCEの関心は低く、PD業務に対応できるCEも2名と限られた現状があった。

【目的】

担当CE以外にも統一した業務が行えるよう、CEにおけるPD療法の知識向上を目指したので報告する。

【対象および方法】

普段PD業務に携わっていない9名のCEを対象とし、PD基礎知識及び当院で行っているPD業務の現状把握を目的に図1に示す内容の確認テストを実施した。その後、CE向けにPD勉強会を開催し、勉強会後に理解度とPD業務に関するアンケートを行い、1週間後に再度確認テストを実施した。また統一した業務が行えるよう、マニュアルの改訂も行った。

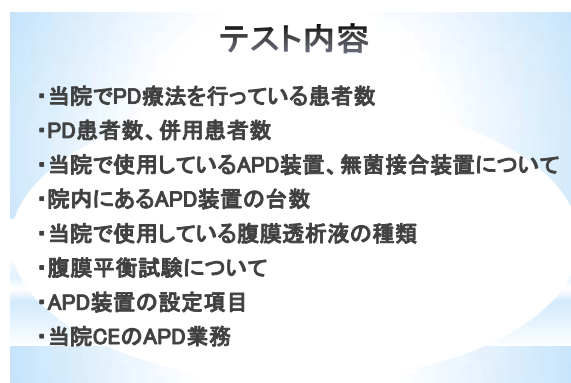


図1 テスト内容

【結果】

1. 確認テスト結果

確認テスト結果を図2に示す。勉強会前のテストでは出題数8問に対し、正答率が100%の問題は2問であったが、50%以下が5問と理解度は低かった。特に腹膜平衡試験についての問題は、ほとんどのCEが理解していなかった。確認テスト実施後に、原理などのPDに関する基礎知識、当院の患者様がどのような条件でPDを行っているのかなどの講義と、実際にAPD装置を使用し指示書を確認しながら、設定を行う実技を含めた勉強会を開催した。その結果、勉強会後の正答率が全体で平均約32%上昇した。

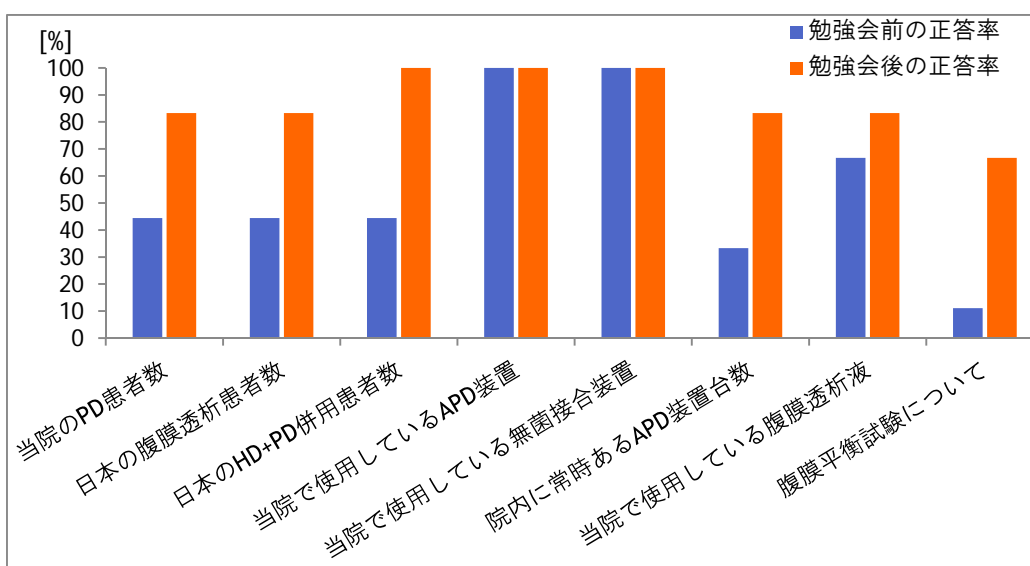


図2 確認テストの結果

2. アンケート内容結果

勉強会後に行ったアンケート結果を図3、図4に示す。今回の勉強会で腹膜透析を理解することができましたか?」の問いでは、「とても理解できた」11%、「理解できた」89%、「あまり理解できなかった」、「理解できなかった」は共に0%であった。「今回の勉強会に参加してCEがPD業務に関わることをどう思いますか?」の問いでは、必要性を感じた89%、どちらかというとなしきを感じた11%、「必要性を感じなかった」、「どちらかというとなしきを感じなかった」は共に0%であった。「今回の勉強会に参加して、PDに対する意識は変わりましたか?」の問いに対しては「変わった」78%で、「変わらなかった」22%であった。変わったと回答したCEにどのように変化したかを聞いたところ、「HDとPD併用患者が増えていく中で、自分の知識のなさを痛感し、もっと勉強していこうと思った。」、「今までPDに関わることなく、あまり興味がなかったが、PDに関してもう少し勉強しようと思った。」、「以前は興味が薄かったが、面白いと思うようになった。詳細も勉強していきたい。」

という意見があった。

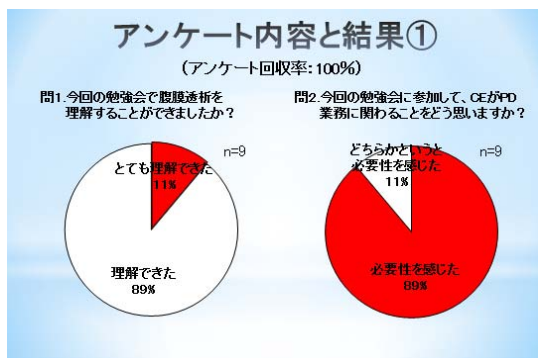


図3 アンケート結果①

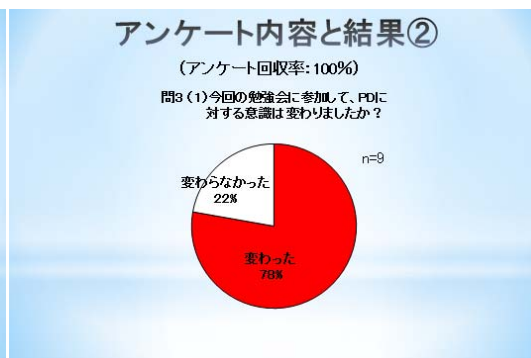


図4 アンケート結果②

3. マニュアルの改訂

PD業務へ新たに携わるスタッフにもわかるように改訂が必要と考え、これまでのマニュアルの見直しも行った。これまでのマニュアルは文字のみであったが、新マニュアルでは、使用するボタンなどを示す写真を挿入しわかりやすく改訂した。(図5)

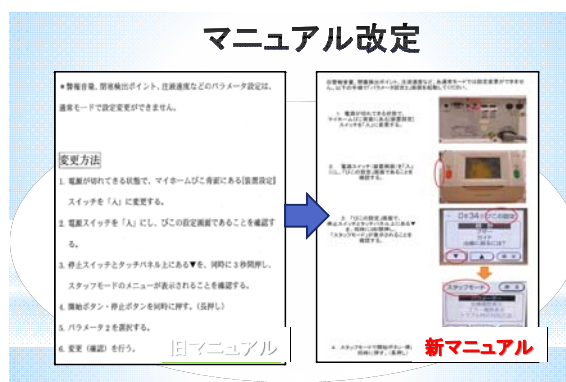


図5 マニュアルの改訂

【考察】

2010年10月に示された「臨床工学技士基本業務指針2010」のなかで、腹膜透析装置の業務は血液浄化装置の業務に準ずると明記されたことに伴い、PD療法に携わる医師よりCEへの技術要請を受け、同年12月よりPD業務を開始した。勤務体制やCEの人数を考慮し、当初PD業務は限られたCEが行ってきた。しかし、担当以外のCEがPD業務へ携わる機会が少ないため、関心も低くなり勉強会前の確認テストの結果で正答率の低さに繋がったと考えられる。

確認テストの結果を踏まえ、勉強会ではAPD装置や無菌接合装置を操作するなど、実際の業務に近い体験が出来るようにした。その結果「今回のように全員で知識を共有していく事も大事だと思うので、とても有意義だった」、「技士として携わる部分が多いことが分かり、PD療法にも積極的に関与すべきだと思った」、「実際の業務、患者さんの状態による設定変更、装置異常時の対応など報告してほしい」という意見も挙がり一定の成果が得られた。今回勉強会を通じて、「PDへ興味を持った」、「PD療法についてもっと勉強していき

たい」という声を聞くことができ、CEのPD療法への関心が勉強会を契機に高まったといえる。

今後はPD業務の事例に沿った内容の勉強会や、看護師も含めコメディカルを対象とした講習を定期的で開催し、院内におけるPD療法の知識向上を目指すとともに、学会や研究会へも積極的に参加し、新しい情報を取り入れていくことも必要であると考えられた。

【結語】

臨床工学科で勉強会を開催することで、PD業務への関心を深めることができ、知識向上を図ることが出来た。

引用・参考文献

- 1) 「臨床工学技士基本業務指針2010」
(<http://www.ja-ces.or.jp/01jacet/shiryou/pdf/kihongyoumushishin2010n.pdf>)
(2013年3月アクセス)